寿で暮らす人々　６１

鈴本　豊さんのこと

　飄々とした雰囲気の、おだやかなご老人…。しかし、赤銅色の顔に細かく深く刻まれた多くのはこれまでの人生を無言に語っているようにも思えました。人との関係は深く交わるでもなく、また、人を避けるということでもなく一定の距離間を持ってつきあっているように見えました。

　平穏な日々が続いていたある日、鈴本さんから意外な相談を受けました。妻から離婚してほしいといわれているので手続きをしたいということでした。

　過ぎし方をお聞きしました。

　「千葉県夷隅郡の生まれ。父は大工でした。仕事で各地を転々と渡り歩いていました。ものごころついた頃は、伯父や叔父が世話をしてくれていました。

　10歳ころに埼玉の鋳物工場に奉公に出されました。その後ぐれだして、東京で人夫出しの仕事などをしました。徴兵検査で補充兵になりました。その後、カラフト開拓の北海道募集に応じ、季節によって炭鉱夫、土工、漁師、などいろいろやりました。

　カラフトで一緒になった妻は、艦砲射撃で亡くなりました。子どもはいませんでした。昭和23年にカラフトから引揚げ、故郷に戻りました。百姓をしたり、海岸に番小屋を作り舟を漕いだりして生活していました。今の妻と知り合い一緒に生活するようになりました。仲人が間に立って25年に結婚し養子に入りました。妻には3人の子どもがいました。いざこざが絶えなくて、二人の間に子どもが産まれて間もなく、家にいるのが嫌になって、26年に横浜に出てきました。

　神奈川区の仲木戸、中区の野毛で日雇い、飯場仕事をしながら34年に寿町に来ました。35年ごろ、一度家に帰った時、妻から離婚を言われた。自分も一人で生活したほうがよいと思っていたので異存はなかったけど、仲人から、もう少し時期を見てといわれ、横浜に戻りそのまま今日になってしまった…。いまさら自分が帰っても迷惑をかけるだけだし、離婚届を出して自分の戸籍を寿に作りたい。」

　戸籍謄本を取り寄せた。失踪宣告により豊さんは除籍になっていました。失踪宣告の取消の申し立てをするため、夷隅郡のＯ町へ奥さんを訪ねました。痩せた身体は強靭そうで、海の波風にさらされた浅黒い顔が印象的でした。妹夫婦とともに生活していて、自分の家もあり生活には不安はないように見えました。奥さんは4～5年ほど前、右目を失明していました。豊さんの健在を告げると「まだ生きていますか、死んでいてもいいんだが…」と淡々と話しました。豊さんの気持ちを伝え手続きの了解をとりました。

　昔の番屋があった場所を聞き、帰りにそのあたりの岩場を歩きました。番屋があったらしい後ろは木々を茂らせた崖で、目の前はただ広い海でした。

　すべての手続きを終え住民登録を済ました後、豊さんは「ああ、これで本当に気持ちが安らいだ。いつ死んでもいいですよ。」といった。家裁調査官に1時間ほど事情を聞かれている間、緊張し汗をかき遠い耳に両手をあてて、懸命に記憶を呼び起こしながら訥々と答えていた豊さんの姿を思い出します。事情聴取が終わった後、「心臓が苦しかった。」といって、その日は一日自室で静かに横になっていました。

　その後、いつにかわらぬ豊さんの姿が街の中で見られました。時に、ほろ酔いで気持ちよさそうに空中を散歩しているような歩きぶりの姿を見かけることがありました。

　声をかけると、照れくさそうに小さく手を振って離れていきました。

　　後姿を見ながら思うことがあります。戦前、戦中、戦後と子ども時代、青年時代、壮年時代を激動の中に過ごした人生だと思いますが、そんなことが想像できないくらいのどかな後姿でした。

次回　寿地区自治会結成の頃とその人々　その1